中日新聞　（第3種郵便物認可）

「大動脈」連日 運休、遅れ

東海道・山陽新幹線 利用者ら疲労や戸惑い

お盆増発 数珠つなぎに

静岡県内の大雨で十六日に一時全線で運転を見合わせた東海道・山陽新幹線は十七日も始発から運休や遅れが出た。上りの博多―浜松、下りの浜松―新大阪では一時運転を見合わせ、午前八時半ごろまでに再開した。東海道新幹線は十七日、上下二十八本が運休し、百六十一本に百四十一～十分の遅れが生じ、約二十一万人に影響が出た。JR東海は十八日の始発から通常通りの運行を予定している。

新幹線が一時運転見合わせから運転を再開したが、運行ダイヤの遅延を知らせるモニター画面＝17日午前11時1分、JR名古屋駅で

JR東海と西日本によると、十六日は運転見合わせでダイヤが大幅に乱れた。東海道新幹線では少なくとも上下百八十五本が運休、二百四十本が最大九時間半以上遅れ、約三十万五千人に影響した。

JR東海によると、十六日の東海道新幹線は山陽新幹線との直通運転を終日取りやめたため、新大阪駅で多数の列車が折り返しのために停車。ダイヤの乱れは十七日明け方まで続き、新大阪駅に到着する最後の下り列車の到着が、上りの始発の出発時間より遅い午前六時半ごろになった。また、新大阪駅に止めた車両を「列車ホテル」として開放した。

その結果、新大阪駅に多くの車両が待機することになり、出発予定の列車がホームに入ることができなくなったり、車両の安全点検に時間を要したりして遅れが生じた。

新幹線の各駅は朝から混雑した。改札や窓口には運行情報を確認する利用客の姿が見られ、連日のダイヤ乱れに疲れや戸惑いを隠せない様子だった。

東海道・山陽新幹線のダイヤが乱れた発端は十六日、静岡県内に降った大雨。局地的だったが同日午前、東京―博多間の全線で一時ストップする事態に陥った。JR東海は、お盆期間で本数が多い時期だったこともあり、線路上に多くの車両がすぐに滞留したことを要因に挙げている。

十六日は富士市で午前十時までの一時間に九二ミリの猛烈な雨を記録。東海道新幹線は午前八時半ごろ、新富士―静岡の雨量計が規制値（一時間六〇ミリ）を超えたため、三島―静岡間の上下線で運転を見合わせた。

昼ごろに静岡、富士、富士宮、沼津の各市で大雨警報が発令され、エリアが路線に沿って広がる形になり、長雨に。車両は続々と滞留することとなり、午後二時すぎまで東京―新大阪間の全線も止まった。

一方、大阪以西の山陽新幹線も東海道との区間が不通となり、まず上りの車両が東に進めなくなった。しかも、東海道と山陽の両新幹線は一緒にダイヤを組んでおり、大阪以西もただちにダイヤを変更するのはほぼ不可能。午前十時ごろから新大阪―博多間の上下線で運転を見合わせ、再開したのは午後零時半ごろだった。

JR東海の広報担当者は、通常よりも本数の多いお盆期間だったため、車両の渋滞が起きやすかったと説明。「一定の間隔を保って車両を止めざるを得なかった。一つの車両が止まると、数珠のように車両がつながり、影響が広がった」とし、「台風のように予想できていれば計画運休もできたが、予想外の大雨だった」と振り返る。

今後の対策についてJR東海は「検討中」としているが、安全運行は第一で、緊急時に停止することは避けられない。

代替輸送手段の確保が求められるが、静岡大防災総合センターの岩田孝仁特任教授は「新幹線は速度も乗客の規模も別の乗り物と違う」と指摘。日本防災研究センター（東京都）の古本尚樹さんも「別の電車やバスなどで代替輸送がしにくい」として、「このような混乱はまた起きるだろう」と話す。

（高島碧）

静岡大雨で全線ストップなぜ

台風7号 温帯低気圧に

台風7号は十七日午後三時、北海道の西の海上で温帯低気圧に変わった。十八日にかけて、宗谷海峡付近を通ってオホーツク海に進む見込みだ。

西日本から北日本で十七日も暖かく湿った空気が流れ込み、大雨が降った所があった。これまでの雨で地盤が緩んでいる地域があり、気象庁は引き続き、土砂災害などに注意を呼びかけている。総務省消防庁の十七日朝のまとめでは、大阪など十府県で計六十五人が重軽傷を負った。